普 及 項 目	養殖
漁業種類等	養殖業
対 象 魚 類	カキ
対 象 海 域	荒尾地先

荒尾漁協におけるカキ養殖の取組み

県北広域本部水産課・直江　瑠美

【背景・目的】

荒尾漁協では、令和３年度（2021 年度）から新しい取組みとして、干潟域でバスケットを活用したシングルシード方式のマガキ及びクマモト・オイスターの試験養殖を開始し、2 年間の試験養殖を経て、令和５年（2023 年）９月に区画漁業権を取得した。

そこで、当水産課では、荒尾漁協のカキ養殖が新たな地元の産業として定着することを目的に、生産から出荷まで一連の技術指導を行った。

【普及の内容・特徴】

（１）荒尾漁協におけるカキ養殖の現状把握

荒尾漁協では、約 700 個のバスケットを用い、シングルシード方式で数十万個養殖を行っている。マガキは天然採苗で、令和５年は約 27 万個採苗するとともに、クマモト・オイスターも令和４年産を約２千個、令和５年産を約２万個養殖している。

当水産課では、養殖現場の現地確認及び聞き取り等を行った結果、現状のカキの管理体制は、基本的には組合員２名体制で、慢性的に作業員が不足していること、漁場まで徒歩 30 分程度かかることもあり、根本的にカキ自体の管理が不足している。また、養殖１年目の夏期に稚貝の大量へい死が発生したため、翌年から月に１度の温湯処理（40℃）を実施しており、大幅に生残率が高くなった一方で、多大な労力とコストがかかっていること等の現在の養殖方法の問題点及びその要因が明らかになった。

（２）有明町カキ養殖場先進地視察及び意見交換会の開催

荒尾漁協は、荒尾市とともに令和５年（2023 年）10 月 11 日に天草市有明町のカキ養殖場先進地視察を行い、当水産課は、視察先の漁業者と効率的で安価に生産する方法等について、意見交換する場を設けた。荒尾漁協の漁業者は、試験販売に向けて浄化設備やカキ殻磨きについて熱心に質問する他、有明町の養殖場で使用している機材等の工夫についても大変参考になったとの意見が聞かれた。

（３）試験販売に向けた漁協及び生産者への取り組み支援

令和５年（2023 年）９月 20 日に荒尾漁協、荒尾市、当水産課で試験販売に係る打ち合わせを行った。この際、当水産課からは海域指定が未取得であることから、当課からは、まずは加熱用として試験販売し、実績を作るよう強く指導した。

その後、試験販売について打ち合わせた結果、荒尾漁協直売所と荒尾市内のゆめタウンのイベントの２か所において、商品は１kg入り袋 1200 円、500g 入り袋 650 円の２種類とし、袋には加熱用と明確に記載したラベルを貼り付けることが決定した。

【成果・活用】

（１）当水産課は、把握した現在の養殖方法・体制等の問題点及びその要因について、今後実施される荒尾漁協のカキ養殖・販売の反省会において報告し、改善策を検討する予定。

（２）先進地視察及び意見交換を実施したことで、生産管理における注意点や安価な機材の入手方法等の有益な情報を得ることができた。

（３）令和６年（2024 年）１月 18 日から２月 23 日までの試験販売により、12 日間で合計約 650 kgのカキを販売し、準備したカキは完売した。試食した購入者からは、味が濃厚で非常に美味しいと好評であり、荒尾産カキのニーズがあることがわかった一方、出荷前のカキ殻磨きに多大な労力とコストがかかり、これも新たな課題の一つとなった。
荒尾市は、有明海沿岸道路の開通（時期未定）、令和８年（2026 年）に道の駅が開業する「地の利」があり、直売所での新製品としてのカキの期待も高いことから、当水産課では安定生産やカキ販売で十分な利益を確保できるよう引き続き支援していく。

【達成度自己評価】
４　目標（指標）はほぼ達成できた（76～100％）

図１：カキ養殖場

図２：直売所の様子

図３：販売の様子

図４：商品ラベル